足立史談

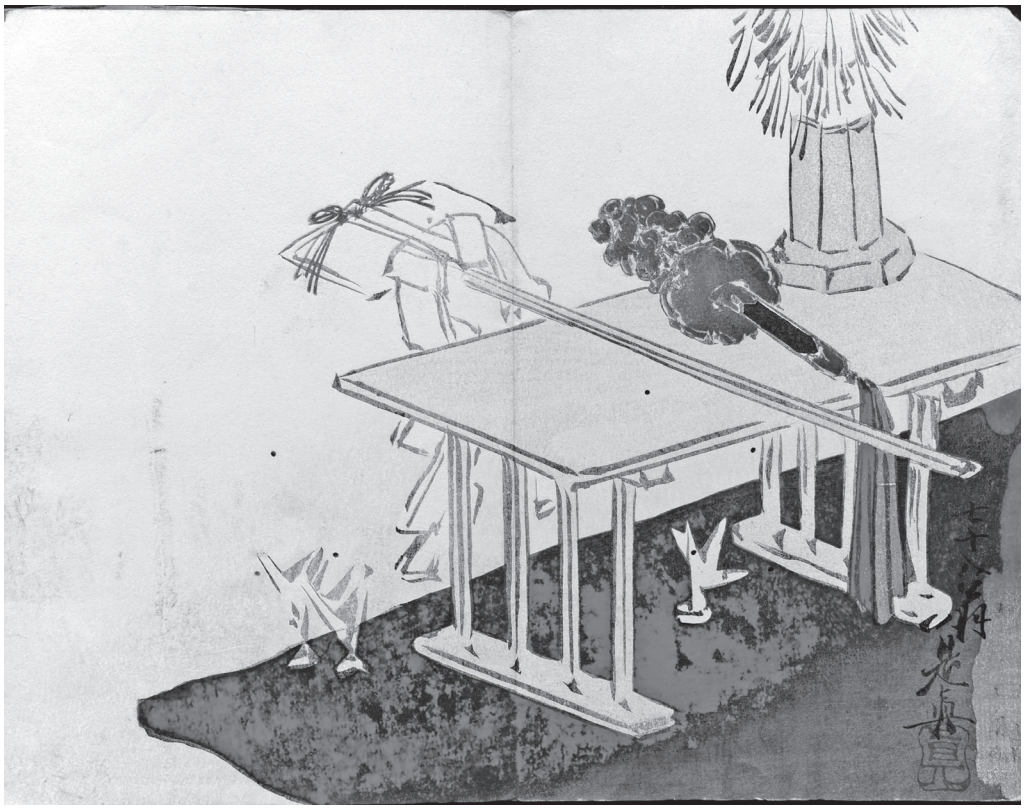
第609号

2018年11月15日

足立区立郷土博物館内
足立史談編集局
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
ＴＥＬ 03-3620-9393
ＦＡＸ 03-5697-6562
〈30-309〉

もくじ

名倉素朴翁と柴田是真《神楽採物図》1P　道具としての屏風 2P
はい、文化財係です。5（道しるべ）3P　スタディデイのお知らせ 4P



明治16年(1883)年　柴田是真《神楽採物図》

【大千住　美の系譜　展　から】

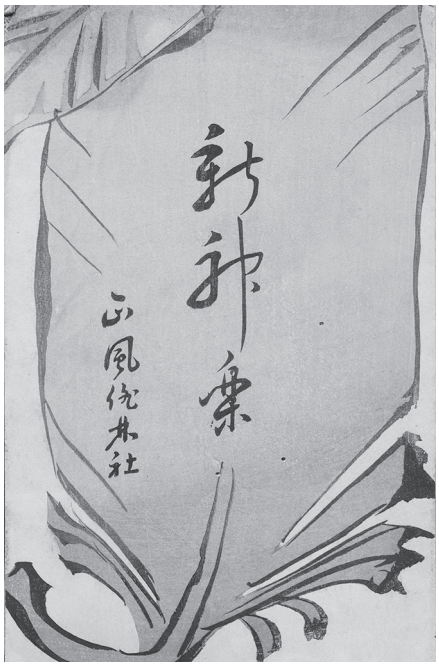
名倉素朴翁と柴田是真《神楽採物図》

郷土博物館

いま郷土博物館で開催している特別展「大千住　美の系譜」展から資料をご紹介します。展示資料の一つに明治十六（一八八三）年に発行された句集『新神楽』（正風俳林社）があります

■『新神楽』と名倉素朴翁　本資料は福島町（現、福島県福島市）の俳諧宗匠、斎藤忍山（文化一〇・一八一三～明治二八・一八九五）が編さんした十一丁の版本で表紙、裏表紙ともに多色刷りの版となっています（**右下写真**）。

本句集には本書を伝来した千住の旧家で接骨医として知られた名倉家の幕末明治の当主、素朴翁名倉彌一氏による「炭の香に時めかしけり草の庵」の句も採録しています。名倉彌一氏（天保一〇・一八三九～明治三五・一九〇二）は文人として知られ、その幅広い交友範囲は当時の政治家、歌舞伎役者、ジャーナリスト、画家に及んでいました。福島俳諧と名倉家のつながりについては未詳ですが、忍山を宗匠とした句集に参画していることから交流があったことは確かです。



『新神楽』（表紙）

■神楽採物図　上掲写真は巻頭に掲載された《神楽採物図》（かぐらとりものず）で作者は柴田是真（しばたぜしん）です。

是真は江戸後期から明治期に活躍した日本画家・漆芸家で文化四（一八〇七）年、江戸両国に生まれました（～明治二四・一八九一年）。

さて新神楽とは、主に明治以降、新しく各地で生まれた神楽舞のことを指します。採物とは神楽舞の際に舞手が手にして舞う祭器具のことで、鈴や祓具の他、剣や鉾など演目に登場する道具の総称です。絵を見ますと、八足案（地域により呼称差あり）という神道の道具や供えものを置く台に、左から幣帛、神楽鈴、大麻（おおぬさ）が置かれています。「新神楽」のタイトルから見て、神楽舞を奏上するにあたり使用した祭器具たちでしょう。そして案の下に三つほど見える白いものは古い形式の「おひねり」です。現代でも神楽舞の際におひねりを投げる例は多くあるようです。今日では金銭を包んだものが一般的ですが、昔は洗米を三角に折った紙に包んで先端をひねり、供えたり、投げたりしていました。このような神事の場に古くから多く米は登場しており、おひねりや神饌の他、散供の一種として直接米を撒く「散米」が、やがて銭を撒く「散銭」になり、これが「賽銭」へと変化したとも言われています。

これらの状況を見ると、もちろん取り合わせのよい画面として脚色やデフォルメがあるでしょうが、おそらく神楽舞の演目が終わり、採物がまとめて取り置かれ、投げ込まれたおひねりが写り込んでいる、という情景を切り抜いたものであろうと見て取れます。是真自身が直接目にしたものかはわかりませんが、村の祭の中で、明治の世に新しく奏じられた里神楽の舞を鑑賞した人々の、喜びや感動が静かに伝わるような画であると言えます。

＊　＊　＊

現在のところ、本資料の研究史は見出せていません。また紙幅の都合で展覧会図録（A4判一二八頁、九〇〇円）にも採録していないため、本紙上でご紹介しました。展覧会では新出・新紹介の展示資料が多くあり、調査研究は緒に就いたばかりです。約一八〇点の公開資料のほとんどが新資料で占める「大千住　美の系譜」展は当館で来年の二月十一日まで開催しています。

（学芸員多田・専門員奥村）

道具としての屏風

特別展「大千住　美の系譜　―酒井抱一から岡倉天心まで―」が始まりました。平成二十三年から行っている文化遺産調査の中で分かってきた、足立という地域に文人文化が深く根ざしてしたことを示す美術品を中心とした資料群を紹介しています。

さて、日本画の美術資料の中でも屏風は大型のものも多く、その迫力は特に目を引きます。

今でも美しい画を残す屏風ですが、元は日常生活の中で使われるごく当たり前の調度品のうちの一つでした。古くは中国から七世紀頃に日本にもたらされ、蝶番の部分が金具の中国式から和紙で繋がれた日本式の屏風になったのは室町頃といい、より装飾性が強く、大画面の一枚絵を描くことも可能になりました。豪勢な「洛中洛外図屏風」「合戦図屏風」などが有名です。屏風を立てた際に、盛り上がりの部分が目立つように見せたり、風景の奥行きを立体的に表現されるように描くこともあります。

「吉野山桜・嵐山紅葉図屏風」（右隻）建部巣兆
六曲の大画面に満開の桜の山々の風景が描かれており、立てた時に山が飛び出したような立体感を見せる効果もある。

屏風は、当然空間を仕切る、目隠しにするという目的の建具の一種です。壁の少ない構造の日本家屋で、自由度の高い間仕切りとして重用されてきました。しかし特別な場合に設置することが多く、普段から常時出しっぱなしにしておくものではありません。そのため軽く、持ち運びしやすく、簡単に設置出来るもの、コンパクトに収納できるものである必要がありました。単純な作りのようで、非常に合理的な建具です。

また屏風は物理的に空間を仕切る事と共に、日常と隔たれた特別にめでたく清浄な空間を演出する（またはその逆の）意味合いが強く、「ハレ」と「ケ」の境界を重んじる日本人の生活の中では、欠かせない道具でもありました。客人をもてなす際や、特に結婚式や祭行事など祝いの席で使われる事が多く、これは美しい屏風によるめでたさの表現と共に、座に招来するカミへのもてなし、清浄な空間を作り出す意味もあります。

正月飾りに立てられる屏風も、ただ背景を彩る目的だけではないのです。今でも祭礼の日に神輿行列などが通る通りに面した家々がとりどりの屏風を見せて人々を楽しませる「屏風祭」を行う地域がありますが、

これも元は道を清めそこを通るカミへ、美しい面を見せると共に自分たちの日常生活という不浄を隠し、失礼のないようにハレの日の空間を作り出す演出が変化したものでしょう。※1

また昔は特に身分の高い女性のお産の際に産屋を全て白くしつらえ、不浄を遠ざけた空間を準備しました。そのために、白絵屏風（白一色で描かれた屏風）という専用の真っ白い屏風を使用しました。そのほか、亡くなった人の枕元にあえて枕屏風を上下逆さに立てるのも、死者の見る世界（現世と全て逆になっていると言われる）の造作であり、これらも単純な間仕切りとは別の意味を持つと言えます。

江戸時代、このように屏風が日用品であったことに並行して、町絵師に屏風に絵を描いてもらう依頼をするのはごくありふれた光景でした。当時の注文簿や日記などにも、絵師宅に屏風を持ち込んで絵を注文する様子が多く記録に残ります。暮らしの中に絵を生業とした職人が数多くおり、それらは産業のうちの一つでした。その中で多くの流派が生まれ、交流し、時には人気絵師に人々が熱狂したのも頷けます。屏風に限らず、娯楽の少ない時代にこのような美術に対する民衆の意識の高まり、室内意匠への文化的興味、希求の興隆が、芸術・技術を発展させることに大きく寄与したことは間違いないでしょう。

旧家や寺社はともかく、現代では住宅事情に合わず、結婚式の金屏風、銀屏風くらいでしか実際に使用されているものを見る機会は減りました。しかしもし現代でも屏風が日常的に使用されていれば、それに付随して現代風のCGアートやイラストを描く町絵師が、今も当たり前に存在していたのかもしれません。今では美術品である貴重な屏風が、生活の中で使用された民具であった側面を考えるのも、面白いものです。

※1　現代でも道を清めた上、屏風の他、祭礼の日にだけ特別な格子や衝立で目隠しをする事例も多く、カミの通り道に対するハレの意識は全国で共通している

（当館専門員　奥村麻由美）

はい、文化財係です。5

救われた江戸時代の道しるべ

■足立区に残された道しるべ

現代では、道に迷ったらすぐにスマホで地図を確認し、GPSで現在地までほぼ正確に知ることができます。しかし、昔の人はそうはいきません。そんな時、人々を救ったのが道しるべです。足立区には今も路傍に道しるべが多く残されています。

足立区では、平成三（一九九一）・四年にかけて区内の道しるべの悉皆調査を行い、平成六年に『足立風土記資料　金石文2　道しるべ』を刊行しています。この調査の結果、道しるべと一口にいってもいろいろな種類がありますが、明治以降に立てられたものも含めれば、区内には一〇一基もの道しるべがあることが判明しています。しかし、この調査からすでに三〇年近くの時間が経過しており、文化財係でも把握できてはいませんが、失われてしまったものもあるはずです。そこで今回は、失われる直前に救われた道しるべについてご紹介します。

■救われた道しるべ

六月、文化財係にある業者から一本の電話が入りました。内容は、工事現場に古い石柱があるのだが、どうしたらよいか？というものでした。

平成３年の様子

話を聞いてみると、どうやら道しるべだということがわかったので、先ほどご紹介した本を開いてみると、しっかりと掲載されていました。そのため、業者の方にお願いして、区で保存することになりました。道しるべは登録文化財にはなっていませんので、業者の方がご一報下さらなければ、この道しるべは人知れず失われてしまっていたはずです。道しるべは十月に引き抜かれ、現在は文化財係が保存し、適切な場所に移設すべく調整中です。

■道しるべの指し示す場所

今回救われた道しるべは、江北二丁目の路傍にありました。正面には「左り　弘法大師道」、右側面には「右へ　六阿弥陀みち」、左側面には「寛政八年丙辰二月吉日」という日付と、「浅草新はたこ町代地」の「上総屋清兵衛」「伊勢屋助七」「つちや清兵衛」の名が彫られています。

道しるべが引き抜かれる前は、正面が北向きになっていました。つまり、道しるべの指し示す左とは東側、右は西側のことになります。江北の東側には、西新井大師総持寺（西新井一・一五・一）があります。道しるべに刻まれた「弘法大師道」とはここに至る道のことを言い、略して「大師道」と呼ばれることが多い道です。西側には、江戸時代に大流行した六阿弥陀詣でゆかりの恵明寺（江北二・四・三）と性翁寺（扇二

・一九・三）があり、六阿弥陀詣でに関する道を「六阿弥陀道」と呼んでいました。足立区にある最も古い道しるべも、恵明寺にある貞享三年（一六八六）八月八日に立てられた「六あミた（道）」の道しるべです。

■立てられた時期

道しるべが立てられたのは寛政八年（一七九六）のことですが、その三年前に、寛政の改革を主導した松平定信が失脚し、前年には鬼平犯科帳で著名な長谷川平蔵宣以（のぶため）が死去しています。そして、足立区で道しるべが多く立てられたのはちょうどこの頃で、十八世紀後半から十九世紀前半にかけてのものがほとんどです。

■足立区外の造立者

道しるべを立てた浅草新旅籠町（現台東区蔵前）の上総屋清兵衛・伊勢屋助七・つちや清兵衛について詳しいことはわかりませんが、三人の他にも足立区で道しるべを立てた人の中には浅草の人が多くいました。西新井一丁目に立っている道しるべは、今回の道しるべと同じ寛政八年二月吉日に立てられた六阿弥陀詣でに関するものですが、これは浅草諏訪町（現台東区駒形）の田村六郎兵衛と下総野田上町（千葉県野田市）の亀屋市郎兵衛の二人で立てたものです。このように西新井大師や六阿弥陀詣でに関する信仰が浅草や下総国にまで広がっていたことが道しるべから理解できるのです。

なお、市郎兵衛の本姓は飯田で亀屋は屋号です。市郎兵衛の先祖が野田市の醤油醸造業を創始したと伝わっており、飯田家の工場跡（亀屋蔵）は野田市の史跡に指定されています。

■後世に伝えるべき道しるべ

今でもそうですが、地図を持って町を歩いていても迷う時には迷います。そんな中で、道案内の矢印のある看板を見つけると安心します。江戸時代の人たちも、現在何気なく残っている路傍の道しるべを見つけて、多くの人が安心したに違いありません。こうした道しるべは、庶民の生活を今に伝える貴重な文化財であり、今後も大切に守り続けていく必要があります。

そして、今回、失われる直前で道しるべを救うことができたのは、業者の方がご一報くださったからにほかなりません。この場を借りて深く御礼を申し上げます。

（文化財係　学芸員　佐藤貴浩）

■郷土博物館では、平成三十年十月三十日から平成三十一年二月十一日までの間、特別展「大千住　美の系譜」を開催しています。本展覧会の調査研究でテーマとなったのが、江戸から明治、大正、昭和と、世代を超えて蓄積した美術と文芸の資料群の存在でした。

スタディデイ（公開研究会）では、調査に携わった関係者が、それぞれのテーマで発表し、時代を超えて継承された資料について、ご参加の皆様と一緒に考えます。

■開催日
平成三十年十二月九日（日曜日）
午後二時～午後四時まで

■会場
郷土博物館二階講堂

■登壇予定者
●玉蟲敏子　武蔵野美術大学教授
●鶴岡明美　昭和女子大学准教授
●岡部昌幸　帝京大学教授／群馬県立近代美術館館長
●足立区立郷土博物館　多田文夫／小林優／山崎尚之

■お申込み方法
電話もしくはｅ－ｍａｉｌにて十二月二日（日曜日）までにお申し込みください。
e-mailの場合、氏名・電話番号・住所（任意）・年齢（任意）を明記ください。
※先着８０名（ご参加の方は観覧料無料）